Hébert, L. 2011. *Tools for Text and Image Analysis: An Introduction to Applied Semiotics* (Trans. Julie Tabler). Available at: <https://pdfs.semanticscholar.org/8efb/82b11a799ff9481354036b5bab3140632213.pdf> (Accessed on 2019.10.13).

Ibn Taymīya, T. A. 1996. *Kitāb al-Īmān*. Bayrūt-Dimashq-ʻAmmān: al-Maktab al-Islāmī.

Izutsu T. 2002(1966). *Ethico-Religious Concepts in the Qur'an*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.

Muṣṭafā, I., et al. 1989. المعجم الوسيط (*al-Muʻjam al-Wasīṭ*). Istanbūl: Dār al-Daʻwa (Çağrı Yayınları).

Partin, H. B. 1970. "Semantics of the Qurʾān: A Consideration of Izutsu's Studies (*God and Man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung*. By Toshihiko Izutsu. Tokyo: Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1964, pp. 248T; *Ethico-Religious Concepts in the Qurʾān*. By Toshihiko Izutsu. Montreal: McGill University Press, 1966, pp. ix+284; *The Concept of Belief in Islamic Theology*. By Toshihiko Izutsu, Tokyo: Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1965, pp. ii+260.)," *History of Religions* 9(4), pp. 358–362.

Rosenthal, F. 2007. *Knowledge Triumphant: The Concept of Knowledge in Medieval Islam*. Leiden & Boston: Brill.

Takeshita, M. 1987. "Japanese Works of Toshihiko Izutsu with Special Reference to Reading The Koran," *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 2, pp. 491–503.

Watt, W. M. 1967a. "Toshihiko Izutsu, *God and Man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung*. 1964, pp. 242+4; Toshihiko Izutsu, *The Concept of Belief in Islamic Theology. A Semantic Analysis of Îmân and Islâm*.1965, pp. 11+250+10. (The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, Tokyo.)," *Journal of Semitic Studies* 12(1), pp. 155–157.

———. 1967b. "The Conception of Īmān in Islamic Theology," *Der Islam* 43(1/2), pp. 1–10.

Wensinck, A. J. 1932. *The Muslim Creed: Its Genesis and Historical Development*. Cambridge: Cambridge University Press.

Zaydān, ʻA. al-Karīm. 2015. *al-Wajīz fī Usūl al-Fiqh*. Cairo: Muʾassasa Qurṭuba. Available at: <https://archive.org/details/mrfarag2004_yahoo_20151231_0838/page/n87> (Accessed on 2019.10.13).

（イディリス・ダニシマズ　人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員、
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任准教授）

臼杵陽『「中東」の世界史――西洋の衝撃から紛争・テロの時代まで』作品社　2018年　302＋xv頁

本書を手にし、まず目を引くのが「中東」にカギ括弧がついていることであろう。この理由について、「中東」が「世界の地域名の中で地理的な具体的名称を含んではいない例外的な存在」であることが指摘され、「そのこと事態がそもそも「問題」」であることから、「その問題性をカギ括弧で象徴させた」と著者は述べる（pp. 11–12）。また、その意図についても「この名称を持つ地域自体の伸縮自在性を意識してほしい」という著者の願望として述べられている（p. 12）。オスマン帝国が滅びた後の「中東」地域は、西洋列強の侵略に翻弄され、現在も政治的に不安定な状況が続いている。「アラブの春」の挫折や、IS（イスラーム国）の登場、難民の大量発生など、挙げるときりがない。本書は、こうした「21世紀の政治的な混乱を規定してきた歴史的諸要因をもう一度冷静に検討」し（pp. 13–14）、「中東」地域をめぐる近現代史を改めて辿り直したものである。内容は多岐にわたり、著者の長年の功績に基づく膨大なる知識や見解が散りばめられている。鋭い指摘がありながらも、歴史の一場面を想像させるような軽快な文章で綴られる本書は、読み手を当時の「中東」世界へと誘うものである。また、著者は歴史家E. H. カーの文言を引用しながら、歴史家がどのような意図で歴史を語るのかが重要であることを指摘した上で、本書が東アジアに位置する日本の立場を念頭に置くものとしている。そのため、随所に同時代の中東地域に関係する日本の知識人や政治家などの人物、日本の近

代に関係する出来事が紹介されており「中東」の世界史における日本の立ち位置についても確認することが出来る。

本書は全８章からなっており、章構成は以下の通りである。また、巻末には詳細な関連年表も付されている。

第１章　「中東」の歴史を考えるために
第２章　近代ヨーロッパとの遭遇
第３章　植民地化への抵抗運動
第４章　帝国主義とナショナリズム
第５章　第一次世界大戦とオスマン帝国の崩壊
第６章　両大戦間期の委任統治
第７章　第二次世界大戦後のアラブ冷戦
第８章　イスラーム復興と米ソ冷戦後の世界

第１章では、「中東」という地域を考えるための前提や、名称の整理、時代区分の設定について論じられる。まず、中東地域の近代の幕開けは 1798 年ナポレオン率いるフランスのエジプト遠征が契機であり、日本との比較では約半世紀の差がある。中東はヨーロッパと隣接しているため近代との遭遇も早く、その後は植民地化されるが、日本は独立を保つことに成功した。そのため、両者はしばしば対比されて論じられてきた。外的諸要因の大きな影響を受けてきた「中東」では、国内政治も外側の国際政治の影響によって規定される。こうした外側と内側の要因が混在する「中東」を考えるために、著者は「前近代における帝国の遺産」や、「中東紛争の原型としての「東方問題」」など４つの前提を提示する（p.27）。とりわけ「東方問題」をめぐり中東で起きた紛争は、外部からの様々な形での介入に伴う代理戦争であり、現在の紛争も「東方問題」的状況として一貫性がみられることが指摘される。東方問題の東が時代とともに変化してきたように、「中東」という地域設定も、時期により名称、範囲ともに変化してきた。「中東」は、東西という方位や遠近あるいは距離の概念が組み合わさり、様々な描かれ方をされてきたとし（p.40）、言語文化圏やイスラームの広がりから「中東」の地域区分が整理される。著者が特筆するように、ムスリム人口でみるとインドネシア、パキスタンについで３番目にインドが入り、イスラームがいまや「アジアの宗教である」という事実は抑えておくべきだろう（p.48）。また、中東近現代史の時代区分は、1）オスマン帝国期（19 世紀―1914 年）、2）英仏支配の「長い両大戦間期」（1914―1956 年）、3）米ソ冷戦期（1956 年―1991 年）、4）ポスト冷戦期（1991 年―現在）の４つに分けられている。本書では、「どの国がどのようなかたちで中東を支配、あるいは影響力を行使してきたかという観点から」（p.52）区分された上記４つの時代の時系列に沿って論じられていく。

第２章では、前半では「中東における 19 世紀全般をどのように見ていくのか、という論点」（p.60）から幾つかの歴史書が紹介され、その記述に従いながら「中東」が近代ヨーロッパに遭遇する過程が論じられる。共通しているのは、19 世紀以降の議論が技術への言及から始まることだという。圧倒的な技術的躍進のもとでヨーロッパが世界を支配した時代、そしてグローバル化の時代が始まるのが 19 世紀である。西洋列強の圧力により、オスマン帝国はヨーロッパをモデルにした法体系や軍事組織の導入などの近代的な改革を行うようになる。その過程で起きたのが、社会レベルにおいて依然として大きな影響を持つイスラームと、政治レベルで導入されたヨーロッパの法体系の二重構造状態であった。『アラブ 500 年史――オスマン帝国支配から「アラブ革命」まで』を記したユージン・ローガンの言うところでは、アラブ人はムスリムとして一つであるという想いを持っており、帝国改革の中で生み出されたオスマン主義も一時は成功したかに見えた。結局は西洋からもたらされた国家や社会についての新たな概念が、トルコ・ナショナリズムを生み出し、ひいてはアラブ・ナショナリズムにつながっていく。著者はローガンについて、中東についてネオコン的な議論があることを意識した上で「外側の勢力に対して主体的に対応する、良ければ受け入れて嫌であれば排斥する」アラブの性質を記していることから、バランス感覚のよい人物であると評価する（p.74）。こうした見方は本質的な見方であり少々危険でもあるが、現にアラブ人たちは外側の影響力をうまく利用したり、操作したりしながら自分たちの利益の最大化に長けていることを、著者も指摘するところである。エジプトの

歴史家ジャバルティーについては、ローガンによる言及や日本人研究者の記述が紹介されながら、彼を「主体性」の観点から評価する姿勢が示されている。

第 3 章では、「中東」が植民地化されるに至った理由と、植民地化に対する抵抗運動が主にエジプトとアルジェリアの事例から描かれる。両国ともナポレオン戦争を戦ったフランスによって開国を迫られ、民族や国民という新たな概念も流入する。また、産業革命を成し遂げたイギリスを筆頭に、新たな市場を求める列強によって経済的にも従属していく。エジプトの場合はアメリカの南北戦争時に拡大した綿花栽培により綿花がイギリスに輸出され、その利益で近代化への投資を図ったが、南北戦争終結後は綿花価格は暴落し、膨大な対外債務のために国家財政は破綻していく。結果として英仏の介入を招き、財政を二重に管理される事態に陥り、植民地化への道筋が決定づけられるのである。アルジェリアは「偶然の帰結」としてフランスの植民地化になってしまうのだが、「最も過酷な形態」であったと著者は指摘する（p. 111）。現地の人から土地を奪取し、フランスを始めとする列強からは次々と入植者たちが入った。「土地という生産手段から切り離された状況」が生まれ（p. 111）、多くは行き場をなくして死亡し、その後の独立戦争でも大勢の市民が亡くなっている。北アフリカ地域はオスマン帝国の属州ではあったが、首都イスタンブルからは遠く、実権は現地の総督が担うという間接統治のシステムがとられていた。そのため、イギリスやフランスとの直接的なやり取りにより経済的な従属化が進み、後には「保護領」として取り込まれていく。植民地化のプロセスには、「背景となる経済的支配があり」、「何らかの口実」が作られて始まることが指摘され、エジプトの場合は副王の権力に対する姿勢を理由に、長きにわたる占領が始まったのである（p. 122）。

第 4 章では、帝国主義の時代の特徴について、日本の高校で使用される代表的な世界史の教科書が参照されながら提示された後、同時代のアラブ世界のナショナリズム高揚について論じられる。総じて、帝国主義の時代とは、生産力増大に伴い、原料の供給源を必要とした西洋列強の植民地獲得により世界が緊密化する時代であり、経済的な従属の側面から描かれてきた。アラブ世界も例外でないだけでなく、植民地化されていない間もオスマン帝国の支配は帝国主義的な性格を帯びていったとされる。バルカン諸国が独立を果たすと、オスマン帝国は残る直轄の領土であるアラブ地域への支配を強め、その中で「反トルコ人」という立場からアラブ人は民族的自覚を持ち始める（p. 137）。帝国主義時代のナショナリズムは、民族や宗教など様々なレベルで噴出した。とりわけ、ヨーロッパ世界とオスマン帝国内のキリスト教諸派が密接な関係を持つようになってからは、西洋列強の帝国への干渉も強まり、同時にヨーロッパ的な意味でのナショナリズムも勃興するようになる（p. 140）。さらには、ヨーロッパの支配が強まる中で「どのようにイスラームを変えて対抗していくか」（p. 147）を考えるイスラーム改革者も現れるが、著者はこうした動き自体が帝国主義時代の産物であることを指摘している。

第 5 章では、第一次世界大戦の勃発がどのように誘引され、オスマン帝国の崩壊へと至ったのかについて、イギリスの「三枚舌外交」やオスマン帝国内部のアラブ反乱の内実とともに論じられる。第一次世界大戦は三国同盟と三国協商の対立から世界規模の戦いへと発展していくが、その際には列強の統治下にあった植民地からも兵士が投入されていた（p. 157）。戦況は塹壕戦となり膠着状態を見せ、その打開策として毒ガスや戦車などの新兵器開発が進み、兵器の製造に女性を含め国全体で取り組むという「総力戦」のかたちが出来上がっていくのである。第一次世界大戦中の中東については、議論の焦点がパレスチナに収斂していることや「中東例外論」への批判を述べるチャールズ・D. スミス（アリゾナ大学名誉教授）の著作を紹介しながら、スミスがここまで批判的なのは同時に、イスラエルによる歴史観の支配やネオコンの中東理解が広く浸透していることの裏返しでもあることを著者は指摘している（p. 173）。さらに著者は、大戦中の中東における重要な点として、ヨーロッパ列強により「ジハード宣言」が政治的に利用されたこととと、オスマン帝国軍によるアラブ弾圧を指摘する。ドイツは、オスマン帝国のスルタン＝カリフに、一方のイギリスは預言者ムハンマドの直系であるマッカのシャリーフにジハード宣言をさせ、両者を競わせるようなことを行ったのである（p. 175）。イスラームが政治的なプロパガンダに利用されたことは、重要な点でありながら見落とされがちであることが示されている（p. 176）。また、オスマン帝国軍によるアラブ弾圧については、現在まで続くアラブ側の反トルコ的嫌悪へと連なる点で重要であるとされる。

著者は、中東では第二次世界大戦以降もイギリスが影響力を保持していたことから 1956 年の第二次中東戦争までの期間を「長い両大戦間期」として設定する。第 6 章ではこの時期の第二次世界大戦までが触れら

れ、委任統治が国際的な妥協の産物として生まれたこと、国民国家という新しい考え方が持ち込まれる中でナショナリズムももたらされ、トルコ独立にみるような民族運動の展開が論じられる。独立を果たしたトルコでは、ギリシャの間で「住民交換」という悲劇的な事態が起き、イランやアフガニスタンは王政のもとに独立、アラブでは実際は列強の言いなりとして据えられたハーシム家の兄弟率いるシリアやイラクといった「委任統治システムに閉じ込められたアラブ世界」(p. 211) のはじまりとなる。なかでもパレスチナ問題をめぐり、イギリスの「三枚舌外交」にみる矛盾した密約については、これが戦時中に出されたその場しのぎのものであったという評価を紹介しながら、フランス、ロシア、アラブ側がそれぞれ自分にとって都合よく解釈したこと、さらにはアメリカが理想主義的な平和原則を提唱したことで事態が混沌としていく様子が詳細に描かれている。アメリカの主張は結果として中東ではほとんど実現されず、委任統治は継続され、イラクのような「最も不自然なやり方で建国された国家」(p. 214) が今も混乱を見せているのである。

第 7 章では、「民族解放」の文脈のもとで第二次中東戦争へ至る経緯が論じられ、米ソの対立だけではあまりにも説明出来ない中東の冷戦期が紐解かれる。著者は、中東で民族解放の動きが出てくる背景について、第二次世界大戦の終盤でドイツの傀儡政権が成立したフランスや本土爆撃で疲弊するイギリスを挙げ、英仏の支配は盤石でなく「「意外と脆い」という意識」(p. 224) がアラブ人に植え付けられたことの重要性を指摘する。戦後独立を果たしたアラブ諸国は、冷戦下の世界に組み込まれていくのだが、いわゆる東西冷戦の構図では説明できず「アラブ冷戦」という新しい見解が紹介される。イラクやシリアで掲げられた社会主義はソ連型のモデルとは異なり、むしろアラブの統一を目指す「パン・アラブ主義」を掲げるエジプトを筆頭にした共和制の国家と、伝統的な王政をとる国々との一線を画す構図が、後に「米ソ対立に重なるかたちで冷戦のような構図」(p. 243) となったことが指摘される。アラブ諸国の側は、実際には対イスラエルとの関係で分裂していたことが明らかなように、元々の亀裂は大きいものであり、アラブ冷戦につながっていくのである。

第 8 章では、イラン・イスラーム革命を転換点にして中東地域に広がったイスラーム化の内実、その後の「中東紛争の二つ目の中心」の出現とアメリカの矛盾した中東戦略がもたらした混乱について論じられる。政治と宗教が一体となり人々を駆り立てるイスラーム復興現象は、後にクトゥブ主義とも呼ばれるイスラーム過激派の源流を生み出し、これがサラフィー主義の思想に結合する形で「十字軍的なアメリカを倒せといったようなイデオロギー」(p. 279) を生み出していく。イランは革命の輸出を掲げたため、これに対抗する形でイラン・イラク戦争が勃発、アメリカはイランを封じ込めるためにイラクを支持するが、一方アフガニスタンへのソ連侵攻に対しては「反共のグローバル・ジハード」を掲げ、イスラーム勢力である義勇兵を支援するという「非常に苦しい両義性を帯びた背反政策」(p. 283) を取らざるを得ない状況に陥った。アメリカのイスラームに対するダブル・スタンダードは、米ソ冷戦が終結すると「イスラーム教徒の過激な主張」だけが残り、9.11 へと突き進んでいくのである。著者は、「二世紀以上にわたってこの中東地域が抱え込んできた諸問題がいよいよ断末魔的な様相を呈し始めている」と締めくくる。

以上のように、本書はこれまでの著者の研究のうえに叙述された中東の近現代史であり、これを世界史の中に位置づける試みであった。さらには、随所に日本の立ち位置が登場する点で興味深く、日本の読者にとって非常に意義深いものである。世界史の中の中東を考える上で、極東に位置する日本は当時どのような政策をとっていたのか、いかなる人物が中東との接点を持ち、どのような考えを抱いていたのかが示される。著者はあとがきで「日本と中東が歴史的にどんな関係を取り結んできたのかを強く意識するようになった」(p. 301) と書いているが、本論点はこれまで通史的に論じられることは少なかったように思う。特定の人物や、歴史的事象を通じて部分的に知ることはできても、本書のようなスケールの大きな視点のもとで、世界史の中に位置づけられ論じられること自体が意義深いものであると言える。

著者が第 1 章で指摘するように、中東が分かりにくい要因は「外部」が「内部」に浸透し、さらには内部も規定していくことに起因する訳であるが、本書ではこれが丹念に紐解かれていく。欲を言えば、現代の中東地域について、つまり「アラブの春」以降の中東地域についてさらなる叙述や考察があると、中東の将来を見通す際にはより有意義であったと感じる。もっとも、中東の現在の状況ははっきりしない部分も多く、「断末魔的な様相」(p. 292) と結論づけるしかないのかもしれない。とはいいながらも、時代は進んでいくし、世代交代も起きる。中東の今後を見通すには、現在の中東における若い世代の主張や動向を繊細にキャッチ

する必要があるように思う。彼らの意思をどのように汲み取るのか、主張や政策をどう評価するのか、さらには世界史の中に彼らをどう位置づけるのか。時期尚早のようにも思うが、こうした同時代的な考察が中東の今後を図るためには重要な点になるのだと感じる。

（佐藤　麻理絵　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教）

長沢栄治『近代エジプト家族の社会史』東京大学出版会　2019年　xiii＋517＋41頁

本書は、著者の長年の研究のうち、家族に関連する研究をまとめた集大成である。アラブ世界において、家族への関心は依然として高く、最近でもスアド・ジョセフが編者を務めたアラブ世界各国別の研究動向をまとめた評論集が刊行されている。同書の序文では、アラビア語では様々な家族を指す用語がある一方で、family に集約する西洋的な理解ではアラブ社会の家族の動態性や歴史的な複雑さを捉えきれないと指摘し、家族を地域ごとの社会的文脈の中から理解する試みを提唱している［Joseph ed. 2018: 3］。本書も同様に家族をエジプト社会史の文脈からみる試みであり、指標となる多くの研究が再録されている。

全体は、2部構成となり、10章とコラム11本からなる。著者が過去に発表した論文を中心に構成されているが、2章とコラム3のみ書き下ろしである。既発表論文については、本書への収録に際し、原則として加筆されていないが、1章のみ現在までの情報が補注という形で加えられている。また、各章の前には、解説が入り、その章が書かれた背景や著者のエジプト滞在時での印象が述べられている。

章とコラムの構成、及び初出掲載誌と刊行年は、以下の通りである（pp. 514–515）。1986年のコラム1が最も古いが、章では、1987年の1章から、2章の書き下ろしまで、30年以上の間に書かれた原稿が収められている。

I　家族の概念と家族関係
第1章　エジプトにおける家族関係の近代化（『現代の中東』1987年）
《コラム・1》　アサビーヤ概念をめぐって（『アジ研ニュース』1986年）
《コラム・2》　エジプト――「家の名」をめぐって（『第三世界の姓名』1994年）
第2章　近代エジプトの家族概念をめぐる一考察（書き下ろし）
《コラム・3》『高野版現代アラビア語辞書』における家族表現（書き下ろし）

II　家族の社会史の諸相
第3章　近代エジプトの村長職をめぐる権力関係（『中東における国家と権力構造』1994年）
《コラム・4》　革命後エジプトの選挙をめぐる風景（『Asahi 中東マガジン』2012年）
《コラム・5》　アメリカとナセル的国家（『Asahi 中東マガジン』2012年）
第4章　都市化と社会的連帯――上エジプト農村とアレキサンドリア市港湾労働者社会との事例比較（『中東の民衆と社会意識』1991年）
《コラム・6》　イスラーム世界の広がりと法秩序――加藤報告に寄せて（『歴史創造の事理と法理』1998年）
《コラム・7》「洪水の後」のアレキサンドリア（『Asahi 中東マガジン』2014年）
第5章　アタバの娘事件を読む――現代エジプト社会における性の象徴性（『地域研究論集』2000年）
《コラム・8》　ムハッガバート現象（『「きもの」と「くらし」』1993年）
《コラム・9》　革命とセクハラ――エジプト映画「678」をめぐって（『地域研究』2013年）
第6章　現代エジプトの社会問題と NGO（『イスラム世界』2000年）
第7章　イスラーム運動とエジプト農村（『エジプトの原理主義運動』1996年）
《コラム・10》　現代メディアとイスラーム（『アジアを知れば世界が見える』2001年）
第8章　世界綿業の展開とエジプト農村の労働力問題（『世界の構造化』1991年）